



今年（平成10年）4月から5カ月間、バンコク駐在事務所にて過ごしたが、その間二つのタイ系諸族研究（Tai Studies）の会合に出席する機会があった。

タイ族が主要民族を構成するタイ国の他にも、中国、ミャンマー、インド、ラオス、ベトナムと広範囲にわたってタイ系諸族の分布が見られる。過去20年間、冷戦後の同地域における内戦の終息と政治情勢の変化とともに、これまで調査ができなかった大陸部の各国や中国での調査が少しずつ可能になってきた。この時期、タイ国自身も経済的に大きく成長を遂げ、隣接諸国への政治的経済的な関心の高まりと、国内の安定的成長に裏打ちされて、国内外のタイ系諸族への関心が高まってきた。こうした研究が今、かなりのデータの集積を果たしたこれまでの振り返り今後を展望する、という時期に来ているのである。

一つめは、6月18-19日に開かれたチュラーロンコーン大学のタイ研究所（Institute of Thai Studies）の主催によるもので、タイ国研究基金（Thailand Research Fund）の助成による「タイ系諸族（Tai）研究の現状評価」というプロジェクトの最終年度の予備的結果報告の会合であった。（本会合の議論の後、最終的な報告書の刊行準備が進められる。）非公開の会合だったが、主催者のご厚意によりオブザーバーとして参加させて頂いた。それぞれの専門分野で、これまでなされてきたタイ系諸族に関する研究成果を総括し、今後の展望を行う、というプロジェクトであり、以下12のトピックについて、準備された報告書に基づいてそれぞれの担当者が発表し、これにプロジェク

二つのタイ系諸族研究集会 （1998年於バンコク）

速 水 洋 子*

ト外から二名がコメントをする、という形でタイ語で進められた。

1. 民族の混合と文化変容
(Anan Ganjanapan, Chiang Mai U.)
2. 民間伝承と文芸
(Siraphorn Na Thalung, Chulalongkorn U.)
3. 宗教信仰と儀礼
(Narumon Hinshiranan, Chulalongkorn U.)
4. 建築・美術・手工芸
(Ornsiri Panin, Silpakorn U.)
5. 政治と統治組織
(Suphang Janthawanit, Chulalongkorn U.)
6. 経済と生態 (Jarit Tingsaphat, Chulalongkorn U.)
7. 言語(1) (Sompong Witayasakpan, Chiang Mai U.)
8. 言語(2) (Nanthana Ronakiat, Thammasat U.)
9. 考古学 (Rasmi Shoocongdej, Silpakorn U.)
10. 歴史学 (Ratanaporn Sethakul, Payap U.)
11. タイ族の起源
(Vilailak Mekaratana, Thammasat U.)
12. タイ系諸族研究の現状
(Theraphan L. Thongkhum, Chulalongkorn U.)

国内各地から、様々な分野における先輩功労者から今まさに研究途上にある中堅から若手までが集まり、300人ほどが入る会場を埋めて、二日間にわたって行われた。

二日間で発表された過去の業績は、タイ語によるものを中心に英欧語の主要な研究も含めて概観していたが、そこに提示されたデータの集積自体が、タイ人研究者によるタイ族研究が今どういう時期にさしかかっているかを示していた。多くの発表は、それぞれの分野に関して例えば、シャン、アホム、黒タイ、あるいはルーなどについて何が研究されてきたか、と羅列するものが多かったが、中には、例えばタイ人研究者のアプローチを英欧語の研究者と比較して、前者における理論や枠組

* Yoko Hayami, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科; Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, Kyoto 606-8501, Japan

みの欠如を指摘するものや、広い視野に立つ比較研究の必要を唱えるなど、今後の方向づけを試みるものもあった。また、各分野において業績をあげた研究者によるコメントは、議論を刺激するものが多かった。特に起源を求めるタイプのタイ系諸族研究に対する辛口のコメントが印象に残る。全体の議論や、休み時間の会話などから得た感触は、タイ系諸族研究が、今（タイ国の経済状況から、研究費に関しても過去10年あまりの潤いが期待できない現状にあって）、反省時期に来ていると同時に、専門分野の違いもさることながら、この十数年間研究の流れを作ってきた牽引者たち、欧米留学経験者、地方大学に身をおいて地道に地元のデータを集めている研究者、など様々な立場の人々が、それぞれの流れを作り始めている、ということであった。また、隣接諸国のタイ系諸族を研究するに当たって、現地（当該国）の研究者との連携の必要が強調され、実際にさまざまな場面でネットワークづくりが進んでいるが、その連携の取り方についても、唯一タイ族が主要民族を成し、しかも地域のリーダーを自認するタイの研究者による、覇権主義的な各国調査のあり方を省み、今後はより bilateral さらに multilateral に発展させていく必要を唱える論調も聞かれた。

もう一つの会合は、マヒドン大学言語文化研究所（Institute of Language and Culture for Rural Development）が主催したタイ系諸族研究の国際シンポジウムで、7月29-31日にトンブリのホテルにて公開で開催された。同研究所は早くからタイ各地の言語データを中心に収集、少数民族言語の辞書や民族資料を編纂し、またタイ全土の言語分布を詳細にコンピュータ処理して言語地図を作成している。今回のシンポジウムは、特にタイ国外のタイ系諸族に関する研究を主な対象としており、同研究所と北京の中央民族学院との研究協力関係を発端として開催されたという経緯がある。そうした背景もあり言語学が中心ではあったが、民俗学、人類学などの成果も発表され、個別発表など、土壇場での中止が目立ったのが残念だが、開始前の発表登録数は70に及んだ。タイのみならず、中国、インド、日本、ミャンマー、アメリカ、オーストラリア、カナダから総勢200名余りの参加者があった。

基調講演には Anthony Diller (Australian National U.), Jerold A. Edmondson (U. of Texas) 及び James Chamberlain と、国外からの言語学者三氏が壇上に立った。比較言語学的視点から、タイ系諸言語の起源を求めて言語分布から直接地理的起源を割り出す方法などの誤りを指摘し、タイ系言語の起源は単一ではないという前提を主張した Diller 氏に対し、特定地域の言語分布や特定言語の分析から民族の移動や起源を跡付けようとする他二氏は対照的であった。最終日は、「国際的視点から見たタイ族の移動パターン」というパネルで締めくくられたが、こちらは言語学 (Jerold Edmondson), 人類学 (Cholthira Satyawadhna, Rangsit U.), 民俗学 (Siraporn Na Thalang, Chulalongkorn U.) それぞれの立場からの発表と、コメントがあった。

個別発表などの論文はトピックもアプローチも多様で、一概にはいえないが、言語学的視点からタイ族の分布、移動過程や起源を論じるものが多く、そのような意味で注目を浴びていたのは中国貴州省、広西省から雲南省にかけての地域であった。起源と分布をたどるといった方向性、あるいは、「タイ族がマジョリティを形成する最大の国としてのタイから発するタイ系諸族研究」という意識がこれまでのタイ系諸族研究の核にあったとするなら、そうした議論が少なからず聞かれた一方で、ここでもタイ人研究者の声に多元化の兆しを感じられた。

最後に、チェラーロンコーン大学の会合の休み時間に、その場に居合わせた数少ない外国人であった私に向けられたコメントは、「調査に行くと日本人研究者にあちこちで出会うのに、各報告書に日本人研究者の名前があまりあがっていないのは、残念ですね」というものだった。一国研究としてのタイ研究とは異なり、国境を越えるタイ系民族に関しては日本でもまだ本格的な研究は始まったばかりといえるが、タイでこのように研究が進められてきている今、日本からも積極的に情報発信をしていく必要を痛感した。

※チェラー大の会合の成果はいずれ出版物として出されますが、当日の資料は、東南アジア研究センター図書館にあります。